

反障害通信

17. 10. 9

66号

なんで、こんな政治がまかり通るのか

—歴史は繰り返される、最初は悲劇として二度目は悲喜劇として—

むちゃくちゃの政治が続いています。小池東京都知事が誕生したとき、なぜ、こんなひとがという思いがありました。

そのことは石原慎太郎東京都知事が何故何期も務めたえたのか、知事選挙で当選し続けた一都民の「支持」を得られたのかということとつながっています。国会内で陰がうすくなっていた石原さんは都知事となって政治的発言力を確保し、数々の差別発言を繰り返していました。そして、棚上げになっていた尖閣列島の所属問題で、国政に介入し、今日中国との緊張関係を引き出し、集団的自衛権を巡る解釈改憲やアベ政治の戦争法、特定秘密保護法、共謀罪などの道を開く貢献をしました。そして、都庁に顔を出す日が歴代知事の中でも少なく、自分のやりたいこと以外は、側近や自民党政治に丸投げして利権政治がうごめく中で、今日の築地の問題など引き起こした責任は大きいのです。また目立ちたがりたいためにオリンピックを誘致し、自らの無責任性ゆえに、利権うごめく中にオリンピック施設建設問題が放り込まれ、そこでの問題も引き起こしたのです。

そもそも都民ファーストや希望の党は、大阪で橋下元知事・市長がやったことの二番煎じです。そもそも、アベ、石原、橋下、小池の思想は極右・ファシスト的思想でつながっているのです。わたしたちは、自民党野党時代に、アベが総裁選に立候補するときに、橋下と一緒にやろうよと働きかけしていたことをはっきりと覚えています。橋下—アベは何回でも会合を重ねています。そしてアベ—小池関係も同じです。大阪維新の会は脱原発を唱えて、市民運動を担うひとたちにも期待を持たせ勢力を一定持ちましたが、大阪都構想の住民投票の際に財界に支持を得るために、脱・脱原発にしました。それにならって、今回の希望の党の立ち上げの時、脱原発をスローガンとして出しました。ところが、もう既に後景化させています。そもそも「都民の生活ファースト」と言って、築地から豊洲への移転の見直しすると言っていたのに、築地やオリンピック施設問題で結局見直しなど実質何もない状況になっています。

民進党を解党的状態にした後、排除とか選別とか言い出しています。「排除」「選別」とかいうことばは差別主義者のキーワードです。そもそも都知事選のときに対立候補を「病人が・・・」とか批判していた差別主義者です。そのときに失言としてすましてしまった、わたしたちの責任のようなことを感じています。女性とすることでの期待のようなことをもつひとがいるのですが、「ゆりかごから墓場まで」というスローガンがあったイギリスの先進的福祉制度を潰したサッチャーやフランスの極右のルペンも女性ということのを忘れているひとがいるようです。

さらに、国政へ戻るなどという噂さえ出ています。まるで石原元都知事の再現です。結論が訳の分からぬことになっている築地問題などまた他者に押しつけて、とんずらするのでしょうか？

更に、小泉郵政選挙のときに習って、立憲民進党の立候補者に「刺客」を放っています。自分自身が刺客として東京の選挙区から出たことの二番煎じです。

どう考えてもおかしい政策のアベノミクスの二番煎じで、「ユリノミクス」など言い出すのはほんとに笑止千万信じられません。

今回、小池がいろいろ「自分ファースト」でチェックするようなことをやっているのを見たら、自分が党の権力を一手に握って独裁的党運営をしようとしていた、日本の保守政治をぐちゃぐちゃにしたひとの顔が思い浮かんだのはわたしだけでしょうか？

ちゃんと歴史に学び、きちんとそのときどきの総括をしていくならば、二番煎じなど起きはしないのです。

「歴史は繰り返される最初は悲劇として、二度目は悲喜劇として」この言葉は、ナポレオンがヨーロッパを掌握しようとして失敗した後に、その甥ナポレオン三世が、同じように登場してきたことを批判したマルクスの言葉です。まさに、同じようなことが繰り返されています。これは、そもそも日本の保守政治で次から次に保守政党が立ち現れてくる、それがそれなりに受け入れられていく状況にも現れています。

そもそも、選挙前に受け狙いのごまかしの政策を前面に出し、選挙後に隠していた論点を表に出してくるアベ政治を見てみると、「二度目は・・・」どころではなく、「三度目」「四度目」の政治、いつまでごまかしの政治が繰り返されるのでしょうか？

よく、「国民」に責任を転化する評論家的なひとがいるのですが、そもそも無関心を引き起こしてきた混乱した政治、政治に関わってきて、それらのことを許してしまっている自らの責任も総括していきたくとも思います。そのようなこととして、今、何が必要なのかを問いつつ、自らが担えることを担っていきたくも思っています。

(み)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 66号」アップ(17/10/9)

◆ホームページのプロバイダーがサービスを停止することになり、ホームページをリニューアルしました。新しいURLは最後のところに載せています。リニューアルにつき、会の名称もきちんと「反障害－反差別研究会」に統一します。また、この際に共同作業に踏み込もうと、入ってもらえる形で、会の方針とかも案ということで、提示しているのですが、こちらはなかなかうまく行きそうにありません。

◆「反差別資料室」という形で、もうひとつHPを作りました。こちらには草案段階の文を載せていきます。また文献の整理もこちらの方でやろうと思っていますが、ちょっと本格的にやり始めるのには時間がかかりそうです。

◆「たわしの対話を求めて」というブログは読書メモ・映像鑑賞メモに純化しています。

読書メモ

今回は、ちょっと集中学習を休んで、読み落として気になっていた本や雑誌を読みました。被差別部落とクリスチンの関係の本は、以前読んだ山口さんの本から派生した本。「自閉症」関係の事件は、立岩さんの本から派生した本。更に障害問題関係の雑誌の特集。後は、わたしが押さえ切れていない障害関係として「難病」関係の本です。

学習計画が錯綜しています。何を先に読むか、ちょっと詰める前に気になっている本を読みます。

たわしの読書メモ・・ブログ 404

・高山文彦『生き抜け、その日のために —長崎の被差別部落とクリシタン—』解放出版社 2016

前回の読書メモはリブ関係の本でした。今回は被差別部落関係の、クリシタンと被差別部落の対立と和解を巡る本です。

「あとがき」にあるように、この本の主人公は3人です。その内の2人は被差別部落に生まれた従兄弟同士の磯本恒信さんと中尾貫さんです。2人は長崎の部落解放運動を作ったひとです。この本のタイトルの『生き抜け、その日のために』は部落解放運動の父といわれた松本治一郎さんから磯本恒信さんに送られた言葉とのこと。334P

もうひとり、セルビア生まれのディエゴ・パチェコ神父は二十六聖人記念館初代館長として、殉教者の資料集めをしていました。後に日本に帰化して結城と名乗ります。

「原爆は長崎に落ちたのではない浦上に落ちたのだ」という言い方がされます。その浦上はひとつの被差別部落と四つの隠れクリシタンの末裔の部落からなっていて、かつて被差別部落のひとたちがクリシタン弾圧の手先として使われた歴史があり、反目し合うという歴史があり、かつ「長崎」から共に差別される関係にあったのです。

部落解放運動を担う2人がクリシタン弾圧に使われた歴史をとらえ返し、そのことの和解なしには長崎に部落解放運動を作れないという思いをもち、一方、結城神父の方も、クリシタンの歴史の資料を集める中で、被差別部落の中にもクリシタンの信者がいて、命をかけてクリシタン弾圧に出動するのを拒んだという歴史や、「浦上四番崩れ」という弾圧の中で長崎を追われ流されたところで、監視的な役割を担わされた土佐赤岡の被差別部落のひとたちから助けられたという「幸せな出会い」316Pの歴史などの資料も探しだし、仏教の部落差別の問題を契機にして作られた「宗教者の会」の賛同人や運営委員などになっています。そしていろんな場で結城神父は講演などをしていくのですが、その発言は反差別というところで、宗教者の基本的態度として見るべきものがあります。

さて、「寝た子を起こすな」というようなことが言われるのですが、差別は自然になくなっていくことではない過酷な差別の現実を書いています。浦上は原爆で吹き飛ばされて、元の体をなくして、「長崎には被差別部落はない」と市長などがいう状況があったのですが、その中で「部落民宣言」をし、部落運動を立ち上げていったという歴史がとらえられます。

さて、本題からいくらか外れ、別な形で書いていくことなのですが、なかなか機会を見つけれそうにないので、メモ的に書き置きます。

部落解放の父と言われていた、松本治一郎さんが当初、利権という形で動いていく恐れから同和対策事業法に反対していたことが書かれています。112P 同和対策事業を利権主義と批判するひとがいるのですが、そして部落解放同盟内部でも物取り主義批判としてもあったのですが、同盟の主導的に動いているひとからもそういう意見がでていたことを、知り得ました。

永井隆さんの原爆や核に対していろいろ批判されていたことがこの本にも書かれています。ブログ 292 の山口研一郎／編・著『国策と犠牲 —原爆、原発 そして現代医療のゆくえ』社会評論社 2014 の中でも書かれていました。わたしなりにまとめると4点①原爆投下を神の思し召しとしたこと②原爆投下によって戦争を早期におわらせることができたとか発言していたこと③核の平和利用というような発言をしていたこと、そしてこの本に書かれているのですが、④として浦上天主堂を原爆遺構として残すことに反対して、撤去して「花咲く丘にしよう」というようなイメージを出していたことがあります。いずれも今日的に反核運動的にとらえ返すととんでもない意見ですが、これらは宗教的論理から出てくることで、内在して批判していく必要があります。それはそもそも長崎に布教したイエズス会自体が欧米列強の侵略の先兵として立ち会われていたこと、この本の中でもいっくらか書かれているのですが、きちんと押さえられていません。前からいろいろ書いているのですが、わたしもカトリック教徒の家に生まれて、幼児洗礼を受け堅信まで進んだのですが、十字軍やイエズス会の侵略の先兵的なところをとらえ返しながら、反差別というところでの、そもそも神とひととの関係の差別性を押さえ、そこから「神は死んだ」という哲学的なところまで至り無神論者になった経緯があります。もちろん、「解放の神学」や反差別というところで動く宗教者の動きもあり、宗教を全否定はしないのですが、そもそも宗教自体が原理主義的にどこまで反差別と言うことに立ち得るかは、疑問を持ち続けています。

もう一点、部落の政治起源説批判が出てきます。このあたりは、あちこちでそういう言説が出てきているのですが、改めてきちんと勉強し直さねばなりません。なかなか時間にとれそうにないのですが。

たわしの読書メモ・・ブログ 405

・佐藤幹夫『十七歳の自閉症裁判——寝屋川事件の遺したもの』(岩波現代文庫) 岩波書店 2010

この著者は養護学校教員からフリージャーナリストになったひとで、立岩さんの本でも紹介されていたひとです。

「発達障害者」の少年が起こした事件の裁判というところで、「発達障害とは何か」というようなことを押さえながら、そもそも少年法の改正などの問題にまで論考を進めています。著者のこのジャンルの本はブログ 408 でとりあげる、朝日文庫の『十七歳の自閉症裁判——寝屋川事件の遺したもの』に続く、2冊目です。

この少年は医学モデル的にいえば「広汎性発達障害」と規定されています。「自閉症圏」のひとつとして、押さえられているのですが、そもそも「発達障害」とは何かということ自体が医学モデル的にも押さえられていません。前にも書きましたが、わたしはいろんな

接点があるのですが、医学モデル的なことを抜け出して、どのような理解と支援が必要なのかというところで押さえ直すことではないかと思います。

著者は犯罪のファクターのようなことを書いています。

(器質的・生得的要因) × (養育環境・生活史的要因) × (文化的・社会的要因)

× (引き金になる出来事) → 犯罪 18P

要素の積み重ねなり、かけ算として事件が起きるといふ、要素還元論自体をわたしは批判しています(註*)。そもそも、現行教育の矛盾として、たとえば、いじめや競争原理の働き、被告少年が不登校になっていった教育現場の矛盾、ひとりひとりひとりに合った教育がなされていない不作為、などなどでこの事件は起きたのであり、もし、そのようなことがなかったらと仮定したら(「仮定は否定である」としても、現象学的なエポケーと言われる手法ではないかととらえたところでの仮定です)、そもそも「障害」ということがどのようなこととしてあるのでしょうか? そのようなこととしてわたしは「障害の社会モデル」を、更に関係モデルまでの転換を提起しています。そしてそれは「犯罪の社会モデル」というようなところにも繋がられます。

「何の罪もない」ひとへなした無差別殺傷事件というようにとらえ方をしているのですが、確かに法的に「罪はない」のですが、そして被害者や家族の負った傷や生活の変化というところで、そして子どもたちやその家族も含めた精神的傷を考えると、責任という概念を広げて考えるのはとんでもないと批判されることかもしれません。ただ、そもそもこれは学校自体のもつ差別的空間への反作用として起きた事件としてわたしはとらえざるをえません。そして、その空間を作り出していつている、加担している責任、そして社会そのものがそのような空間を作り、それを許してしまっている責任の問題があるのではないのでしょうか?

「何の責任もない」ということが言えるのでしょうか? たとえばフクシマ原発事故が起こった時、安全神話をとなえていたひとたちは想定外といつて責任回避していましたが、その虚構は明らかになってきました。そして、原発の危険性で論陣を張っていたひと自身が「危険性の言説をきちんと広め、原発を止め得なかった責任」を言い、反省の涙してました。そして、きちんと反対運動をやつて来なかった責任といふことの反省組の運動として、反原発・脱原発の運動への参入が起きています。そもそも日本が進んだ戦争と植民地支配の責任自体を曖昧にして出発した問題とか、あらゆる政治的な責任をないがしろにしてきたことで、歴史修正主義者の台頭や、平和憲法の改正とか、一連の戦争とファシズムへの台頭が起きてきています。この社会を形成しているところでの責任の問題が欠落させられてきたのです。

少年法の改正で、重大事件の逆送致が当たり前になってきているのですが、更生や教育という観点から、少年院や保護観察といふことがあつたこと自体を、そもそも、少年法のみならず、刑法自体に再犯の防止といふ意味も含んで、更生・教育を考えていたことをスポイルして、厳罰化といふことでないがしろにしてきている流れがあります。刑法体系自体を復讐・みせしめ的に純化しているのです。だから、被害者やその家族も復讐的なことを望むといふことがあるのです。そもそも「犯罪」といわれることのほとんどが、この社会の矛盾の矛盾、差別の反作用としてあるとき、被告を裁くとしたら、「社会」も裁かれる

べきなのです。それは犯罪がおきないような社会に変えるということです。そのことをなしえぬまま、ますます社会の矛盾が大きくなっているときに、そのことをさておいて、厳罰化などというのは、むしろ蓄積されて矛盾の爆発的な「犯罪」ということでの「犯罪の凶悪化」にならざるを得ないし、厳罰化しても、むしろ「死刑にして欲しい」という自死願望的なところの事件が多発してくることになります。

そもそも犯罪が起きて更生とかいう以前に、教育空間自体の問題をなんとかする必要があるのでと思います。

著者自身も、1冊目の本を出して、触法「発達障害者」の問題を再び書くことに迷いがあったようなのですが、「発達障害」の特異性ということに留目しようとしているのですが、わたしはそれよりも関係性の問題として、社会の矛盾がそこに現れてきたこととしてとらえ、とらえようとしています。

いつものように抜き書きです。

改正少年法の問題点 105P

「精神科医は自分だけの墓碑銘をもっている」 125P

謝罪 192P・・・という、役割期待と役割遂行・・・「発達障害者」が苦手なこと
逆に規定 218P

「従来とは異なる洞察が司法精神医学に求められている」 231P・・・西洋近代の人間観から問題にしていく 「まだ精神科医の間でさえ議論が始まっていない」・・・哲学ではすでに始まっている

原則逆送 317P

註* 「吃音」問題で、「ジョンソンの吃音の関係図」ということがあるのですが、それにも通じることです。

たわしの読書メモ・・・ブログ 406

・『現代思想 2017年5月号 特集＝障害者——思想と実践』青土社 2017

この雑誌は毎月チェックしていて、ときどき購入して読んでいる雑誌、積読になっている号もかなりあります。障害問題関係の特集が時々あるのですが、今回は「思想と実践」というサブタイトルがついているような内容、買った直後にざっと目を通して、ちょっとわたしの関心事にひっかからないような思いがあったのですが、実際読んでいくと、かなり興味深い内容でした。こういう感じで何でも読んでみようという考えも必要なのですが、何を読めるか限られていく中で、難しいものがあります。

で、このメモも「書評」という本の批評を書くというよりも、メモということで、そのときそのときのわたしの関心事にひっかかったことで文を書き残しています。メモを残さなかったところで、後になって、他のところで著者の書いた文を読み、その著者の文を別の機会に読んで、他のところでも探して再度読んだり、積読していたところからまとめ読んだりすることもあるのです。

そういうところで、今回も気になっていて、他の文もメモを書いておきたいという思いを引きずりつつ、ピックアップしたものだけ残します。

この特集の一番の目玉とわたしが感じたのは、熊谷晋一郎さんと杉田俊介さんの討議「「障害者+健常者運動」最前線一問をつなぐ「言葉」」です。熊谷さんは今あちこちで発言をして注目されている「障害者」当事者で、「依存先をいろいろもつということが自立だ」という内容の発言など、今後理論的にも期待されているひとです。ただ、お医者さんでエリート「障害者」的に周りが持ち上げていくことがあり、「「障害者」の社会参加」的などころへ行ってしまわないかという、まあ杞憂的なこともあるのですが、「社会モデル」や関係モデルというところでのわたしの社会変革志向で、ちょっと違和的なことも感じてしまっています。杉田さんは立岩さんと相模原「障害者」殺傷事件で、共著・立岩真也／杉田俊介『相模原障害者殺傷事件 —優生思想とヘイトクライム—』青土社 2016 を出しています(ブログ 386)。杉田さん自身、この社会との違和を感じているひとのようで、わたしの障害規定からすると「障害者」なのですが、本人はそのような意識はないようだし、この討議自体が当事者意識をしっかりとって当事者研究をしているひと(熊谷さんは『発達障害当事者研究』で「障害者」当事者からとらえた「発達障害当事者研究」にコメントして共著を出しています)とマージナルな無自覚的な「障害者」との対談になっていて、そういう意味で結構深い討議になっています。そこでも共鳴し合う部分があって、わたしも共鳴した内容に踏み込むこととなのですが、わたし的には深化的なことがあまりなく、流れてしまっているの、とりあえずパスしておきます。

猪瀬浩平「我が事・丸ごと、なにをするものぞ」と坂川亜由未／智恵「一緒にいることで、生きていく」は「障害者」きょうだいと親子の関係で、「障害者の否定性」を反転させて見せている興味深い話でした。

斎藤縣三「地域で共に生きることを求め続けて」の斎藤さんは「わっぱの会」や共同連で有名な人、地域で「障害者」の働く場作り、生きる場作りをやってきたひとです。ただ、地域共同性の当事者よりも前に出てしまっているとか、そもそも労働ということでの「障害者」を否定的にとらえてしまうところの問題で、そもそも今の社会で労働という事が持つてしまう意味が当事者の思いとずれてしまっているとかということがあって、もちろん過渡的には意味のある実践の意味は大きいと思うのですが、わたしの深化志向で、全面的共鳴にはならない(「全面的共鳴」を希求するわたしの方が間違えているといことは承知していて、ないものねだりになっている)のですが。

対談 米津知子+大橋由香子「女のからだだから」はリブの「産む・産まないは女が決める」というスローガンで、「「障害者」と分かたら産まない」というのは差別だ」という「障害者」サイドからの突きつけが、優生保護法改悪運動への連帯で、一応選択的中絶は許されないというところで整理されたのですが、まだフェミニズムサイドもすっきりしないということがあるようなのです。これについては、近々、わたしの「反障害通信」の「反差別原論への断章」で文を書きます。

上岡陽江／アサダワタル「不自由な<表現>がつなぐもの」は「依存症」のひとたちの問題を取りあげています。「信じることを奪われているひとたち」とか他者を傷つけるひとたちをも一旦丸ごと受け止めという姿勢とか、言わないことの意味とかとらえ返していくこ

となど、わたし自身経験した「吃音者」の団体でのグループワークの経験と重なり、それをとらえ返しつつ、「自助グループ」（このことばは「吃音者」の団体では「セルフ・ヘルプグループ」ということばで使われていました。わたし自身はこの言葉に違和がありました。）のもつ意味などいろいろ共鳴とか考えの深化とかをもたらしてくれていました

渡邊琢「介助者の痛み試論」は介助者も傷つけられているというところでの論攷で、「障害者」の側が日常的に傷つけられているところでの反作用として、介助者を傷つける行為が出てくるという観点はちゃんとあるのですが、もう少し反差別というところをきちんと押さえた反差別連帯的なところで、怒りをどこへ向けていくのかの観点を出して欲しいと思いました。

冒頭で書いたように、まだコメントを残したい文もあったのですが、とりあえずここまで。

たわしの読書メモ・・ブログ 407

・『現代思想 2017年8月号 特集＝「コミュ障」の時代』青土社 2017

この雑誌の特集、「コミュ障」ということば自体が流行語になっている感があります。

わたしは反障害論の中身として、マージナル・パーソン論をやってきたので、「発達障害」概念が出てきたとき、ひとつは相も変わらず医学モデル的なところで、「障害」規定を増やしていくことに反発しつつ、関係モデル的なところで、障害を広くとらえ返していく事への期待を持っていました。一般に医学モデル的なところで、「障害」の「重いー軽い」が語られるのですが、正規雇用の中では、採用する側で「コミュニケーション能力」重要視が語られ、むしろ他の「障害者」比しても排除されていく側面も強いこともあります。わたし自身、「吃音者」というまさに、マージナル・パーソンの存在として、この特集は興味深いことがありました。ただ、そもそも障害概念の整理をさておいたところで、問題が錯綜していくことに何か不全感を持ち続けているのですが。

この特集の中で、グループワーク的な話が出てきます。新しいこととして、北欧から始まっているオープン・ダイアログの話は、「吃音者」の団体の中で、エンカウンター・グループとか L グループとか経験してきた立場で興味深いことがありました。それなりに、この差別社会で折り合いを付けて生きていくすべを得ていくということではこういう実践もいろいろ試行錯誤していくことではないかという話もしていました。ただ、わたしとしては、反差別というところで、障害問題をとらえ返してきた立場で、もう少しここから問題をとらえ返し整理していく、掘り下げていく必要を感じています。

さて、いろいろ参考になったところで、抜き書きをしておきます。最近抜き書きが不調です。どこまで、ちゃんと残すのか、そもそも備忘録で、ついでにオープンとして始めたことで、文を書いているひとの思いを捨象してしまっているのです。全部メモ書きしていたら、時間が足りなくなるのです。余りにも学習することが多く、追われている感が強くなってきています。何を勉強するかではなくて、何を勉強しないままにしておくかみたいな心理になって来ています。人生を楽しみながら、学習し活動していくという姿勢にはほど遠く・・・。

平田オリザ「演劇を教える／学ぶ社会」

会話(conversation)と対話(dialogue)の違い 39P

討論Ⅰ 国分功一郎／千葉雅也「コミュニケーションにおける闇と超越」

「心の闇」をいかに育むか。それがコミュニケーションの根本でしょう」(千葉発言)

樫村愛子「コミュニケーション社会における、「コミュ障」文化という居場所」 — 「コミュ障」文化

大黒岳彦「情報社会の<こころ>—<社会の外部>の消失と「コミュ障」 — 「引き籠もり」

「外部—内部」の問題 共同幻想と上部構造のとらえかた 102P／国家の介入の過小評価／廣松の援用と廣松とのズレ

討論Ⅱ 斎藤環／信田さよこ／森川すいめい「ダイアログの場をひらく—「コミュカ」偏重社会の分断を超えて」

スクールカースト 117P／お笑い芸人のコミュ 119P／空気とノリが発話を抑圧 120P／

同調性を前提にしたコミュカ 123P／想像的他者・現実的他者・象徴的他者 123-4P／

「聞く」と「話す」を分ける 124P／調律する 126P／「正しさ」や「真実」は有害であるという発想」 132P・・・「愛と正義を否定する」

矢原隆行「ダイアログのオープンさをめぐるリフレクティング」—オープン・ダイアログ・・・開かれた対話—開けゆく対話

山森裕毅「<自分の言葉をつかまえる>とは?—制度分析から見た対話実践」—制度分析
綾屋沙月／上岡陽江「発達障害と依存症の仲間が交差するところ—私たちのコミュニケーション方法の開拓と継承」

「HALT」 166P・・・身体性から感情をとらえる／「ばれない指数」—「つながっていない指数」 168P／コントロールのにおいへの指摘 170P／できなくても大丈夫 177P／

「ちゃんと当事者からの意見を聞いている」との勘違い—「こちら側が「言えている」状況があつてですから」 179P

自助グループのあり方、抱えている問題の大きさ・深さ、かかえ方

菊池美名子「支援／被支援を編みなおす—感染、あるいは厄払い」

持続エクスポージャー(暴露)療法(Prolonged exposure therapy・・・PE)の見直し／ジャジメントを手放す

貴戸理恵「「自己」が生まれる場—生きづらさをめぐる自助活動としての居場所と当事者研究」

相互調整 215P／入れ子 216P

たわしの読書メモ・・・ブログ 408

・佐藤幹夫『自閉症裁判 レッサーパンダ帽男の「罪と罰」』(朝日文庫)朝日新聞出版 2008

この著者の読書メモはブログ 405 でとりあげています。読む順番が逆になっていて、この著書が著者の最初のノンフィクションの作品です。裁判の傍聴をしながら、加害者・被害者の家族や支援のひとたちにも綿密にインタビューをしながら、それぞれの立場のひと

に思いを馳せて、書かれた著書です。事件の概要、裁判でのやりとり、加害者、被害者のインタビューを絡み合わせながら、なぜ事件がどのようなこととして起きたのかを、より合わせるように描き出していて、読者に事件がなぜ起きたかの、ぼんやりとした、でしかないのですが、読者からそれなりの個々の思いを引き出す秀作です。

この著者は、前のブログにも書きましたが、養護学校教員として勤務したことがあり、「自閉症」のひとたちと出会い、その立場から、この事件に留目し、加害者側の支援的などころから裁判傍聴に入っていています。

一般に、加害者、被害者どちらかの支援をすることになります。そもそも加害者側の支援をしているひとは被害者側から拒絶されるので、双方のインタビューを取っていくのは困難なのですが、加害者も被害者ではないかという観点から、そして犯罪を憎み、きちんと贖罪して欲しい、そして犯罪を防ぐすべを見いだしていく、というところで動いていたからとれたインタビューなのだと思います。

そもそも著者が仕事をしていたときには、「自閉症」と規定される「障害」のこと自体が、まだはっきりしていない時です。この裁判の支援をしていたひとのひとりに、加害者の特別高等養護学校の担任だったひとがいて、そのひとも担任をしていたとき、自分の生徒が「自閉症」と規定される生徒とわからないまま生徒に接していたのですが、自分の事情で3年目の担当を外れ、双方が引越などして連絡がとれなくなってしまったことや、自分が担任していたときに十分に対応していなかったことが、この事件につながったことの自責の念から支援を続けていたのです。この「自責の念」ということが、この著書の表にでないようなベース音的なことを奏でています。加害者の生まれ故郷の北海道で触法「障害者」の支援も含めて「障害者」支援をしてきた「共生舎」のひとが、自分たちがコンタクトをもちえていたらこの事件を防ぎえたのではと、自責の念にかられて、裁判支援を始め、加害者の父や妹の支援に入ります。このノンフィクションの最終章は加害者の妹さんの話です。この事件で、「共生舎」の支援につながり、がんに冒され死に至る最期のときを、「楽しいことなど何もなかった」という人生から、それなりに楽しみを味わえた(?)生として閉じるのですが、自分が兄に「家には二度と戻って来るな・・・」と言ったことが、犯罪につながったのではないかという自責の念に襲われ、年代の近い被害者の生を切断した兄を許せないという思いも抱いていたようなのです。

「加害者」という言葉を使い続けているのですが、加害者家族の社会から切り離された、福祉や支援から切り離された生を見ると、加害者も被害者なのだということが、はっきりしてきます。わたしは「障害の社会モデル」について学習しているのですが、そのことは「犯罪の社会モデル」ということにもつながっていきます。ひとりの「犯罪者」と規定されたひとが、「犯罪」に至るまでの過程を、この本はそれなりに明らかにしてくれています。それを見ていると、「犯罪者」の責任を言い「裁く」前にか、同時か、後か、どちらにしても「社会の責任」も問題にしなければいけません。裁判員裁判などという恐ろしい制度に加担させられるとしたら、そこで有罪の判決を出すとしたら、自分も社会の一員として、自分自身が社会の構成員として「自分自身の有罪」を宣告することです。

こんな話をしていると決まって、同じ「障害者」でも事件を起こすひとと起こさないひとがいる、貧困が犯罪を起こす最大の原因になると言っても、貧困者で犯罪者を起こすの

は一部であるから、そこに自己責任の問題がある、という意見が出てきます。わたしは、それは頼るひととか、関係的に救うひとがいる、そこから「犯罪」の道に入るのを防いでくれるとかいう話をしています。更に、これはもっとマクロ的にとらえれば、福祉や教育の不作為ということを含めた問題なのです。

この本の中で、被害者の親戚のひとの、被害者は地雷を踏んだのだ、地雷など除去しなきゃいけないという発言がでています。被害者もその親戚も傷つけられた立場で、感情的になっていく心情は汲むことで、論理的な話とはとどかないのかも知れません。でも、地雷は自然物ではないのです。作られた物です。誰が作ったのか、どのようにして埋められたのか、この本でもそのことを探ろうとしているのです。不作為ということも含めた「社会」の責任もとらえることです。

もうひとつ、この裁判は「自閉症」ということを出したおそらく初めての裁判です。で、その無理解とかいうところで、「自閉的傾向」というところで検察・裁判所に押さえ込まれて判決にいたり、そして警察の取り調べ段階から、警察が加害者が抗しきれないところで、かなりの部分をでっちあげていったのではないかという疑義が出ています。この著者が次に関わったブログ 405 の裁判では、弁護団が主張していることが、少しは押さえられるようになって、もう少し、「自閉症」ということがとらえられた裁判になっていったということもあったようです。この裁判に関わった弁護士さんは「障害問題人権弁護団」の立ち上げにかかわったひとで、そのひとり副島さんは数年前に亡くなりました。お通夜に行ってきたのですが、合掌—

今、ちょうどむちゃくちゃな政治状況の中で、この本を読んでいたもので、そこでの思いにつなげて、蛇足的な文になることを恐れつつ、それでもあえて書いておきます。

フクシマ原発事故が起きたとき、安全神話を唱え拡大していくことを担ったひとたちは想定外だとして（後でほとんどが嘘だと分かっています）、平然と責任回避に走りました。そのことを想定して、ちゃんと危険性を訴えてきたひとがむしろ、力及ばずして止め得なかったと、自責の念にとらわれ涙していました。原発事故の責任を誰もとってはいません。事故は起きないと断言していたアベ首相が、事故後首相に復帰しました。今、原発震災関連死、郷里に帰れなくなって死んでいったひとが2千人にも及ぶと言われています。それなのに、誰も刑事責任をとることなく、原発の再稼働を進め、原発の輸出さえ進めようとしています。そして戦争ができるようにと、憲法を無視して、勝手に解釈を変えて突き進んでいます。更に戦争ができる国へと憲法「改正」にまで突き進もうとしています。それは地雷どころではなく、核爆弾を作動させようとするのです。

多くの「犯罪」と言われることは、差別の反作用として起きることがほとんどです。そうでないことは、権力犯罪としておきること、お金儲けや政治家個人の名誉として、むしろ差別する側のひとが起こすことです。このことこそ、責任がとわれることです。そして言うまでもなく、それを許してしまっているのは、民衆のひとりひとりです。そういう政治家に積極的に投票するか、無関心から支持したひとたちや、力及ばずして止め得なかったこと、それぞれがそれぞれの「社会を構成している・構成させられている」責任ということがあると思うのです。

もちろん、犠牲ということは数の問題ではありません。自然災害も含め犠牲がでたとき

は、数として何分の一、何万分の一かもしれませんが、当事者や家族・友人にとって、一分の一なのです。ですから、刑事事件の場合、被害者家族から喪失感から怒りが加害者に「重刑」を求める動きが出てくるのですが、同時に「犯罪の社会モデル」的なところをとらえ、「社会」の責任とそれを構成している・させられている自分の責任も問うていくことが必要なのだと思うのです。

さて、抜き書きです。

時代動向の中のこの裁判の位置 47-8P・・・池田小事件・医療観察法制定の動きの中でのこの裁判

「自閉的傾向」ということでのごまかし 114P

著者の「自閉症」論 120-4P

「犯罪加害者となった障害者の支援は、被害者をないがしろにすることになされてはならない。しっかりと被害者に向き合うことができたとき、ほんとうの障害者支援になる。また逆に、被害者への支援は、いたずらに加害者への憎しみを煽るようなことになってはならない。むしろその逆ではないか。加害者の憎しみが消えていくような支援こそ、もっとも力となる支援なのではないか」 169P・・・犯罪加害者への支援と被害者支援の弁証法

「国家が国家のために行うものが刑事罰である。」 176P

「答えは男のなかにではなく、むしろ私たちのほうにあるのではないか。彼らの独特の世界と、なにを共有でき、なにが共有できない決定的相違なのか。その「壁」のようところで、近づきあぐねているのではないか。少しずつ、私はそう思いはじめている。」 193P・・・「障害の社会モデル」的なことに通じる反転

「人としての「罪と罰」を求めればこそ、障害への理解が不可欠になるのであり、それなくして責任も贖罪も十全たるものとはならないのではないか。ほんとうの意味での再犯の防止とはならないのではないか」 278P

「「内面」があることによって「言語」が生まれたのか、言語をもったことによって「内面」が生じたのか・・・強い相関関係・・・」 332P

たわしの読書メモ・・・ブログ 409

・大野更紗『困ってるひと』(ホプラ文庫)ポプラ社 2012

この著者はビルマ難民支援をしていて、大学院に入ったところで自分が「難病」になったひと。著者自身は「闘病記ではない」と書いているのですが、これでもかという「闘病記」です。でも、病気での苦しさと、理解のない中での苦しき、難民支援をしていた経験から、どういう支援が必要かという、支援・制度の問題を押さえようとしていて、病院を出るところで、ここからが自分の新しい始まりだとしているところで終わっています。

ひとはこれほどまでに自らの体験で鍛えられて「強く」なっていくのかという、むしろその経験のもたらしたこととしての、このひとの生き方のようなこと、とても心揺さぶられるのです。こんなことを書くと、「強くなんかないし、強くなんかなりたくない」ときくと著者から叱られるのでしょうか。

暗い文にしないという思いがあるのでしょうか、文体自体が今時の若いひとのキャピッ

た風の文で明るさを醸し出そうとしているのですが、内容が重い内容だから、余計切なくなっていくます。

「難病一障害」として押さえて、どう支援の制度を作っていくのかというところで、とても大切な本です。ネットワークが作られつつあると思うのですが、それにしても制度の谷間とか、そもそも支援が必要なひとに支援が届かない、この国の「福祉制度」はどうなっているのかという、怒りのようなことをわたしは思わざるをえませんでした。そもそも、お金の使い方がおかしいのです。必要なひとに必要なものを提供していける社会をつくっていけるはずなのです。こんな生きること自体が苦しいひとに、支えるシステムを作らないと、ひと総体が生きて行けないのです。金持ちの金儲けのための経済とか戦争への道に金を使うなんて、どう考えてもおかしいのです。そんなことに使う金があれば、もっと支え合える関係が作れるのです。

切り抜きメモ

「わたしは、友達を、実は搾取しているだけなんじゃないか!」 172P

「その国の「本質」というのは、弱者の姿にあらわれる。難病患者や病人にかぎった話ではない。あらゆる、弱い立場の姿に、あらわれる。／ビルマ女子は、タイやビルマで、路上や難民キャンプで、苦しむ人たちの姿を見てきた。貧困の姿もまざまざと見てきた。しかしそれは、いくら旅を続けようが「他人事」でしかなかったのかもしれない。／「これが、苦しむ、ってことか」／わたしははじめて日本の、自らの「本質」と向き合った。」

173P

「わたしは、「難」の「観察者」ではなく、「難」の「当事者」になったのだ。」 174P

「ここはマリアナ海溝なのだ。難病患者は、「制度の谷間」に落ち込む、福祉から見捨てられた存在だった。」 207P

“今一番感じていることは「開発」「援助」、それらの言説そのものへの疑問である。「住民参加」や「住民主体の開発」という言葉の裏には、援助する側、援助される側、の権力構造が見え隠れする。／ビルマの難民キャンプの暮らす人びとにカネやモノを援助し続けることは、確かに一時的に凌ぎにはなっても、彼らの苦境の根本的な原因を取り除くことにはならない。／最も周縁化され、最も援助を必要としている人びとにとっての最良の支援、政治的な構造を変革することなしには実現し得ない場合が多いのではないのだろうか”237P・・・著者自身の卒論を自分の今置かれている立場から、読み直し引用しています。

「よくなっています」という医者のことばは、医者サイドの立場からの発言、「よくなっています」と患者主体に変えて欲しいという押さえ方 316-7P

「ということで、オアシス(入院していた病院、ひいては医者のこと・・・引用者)の頭脳は、医学的には述べる贅辞が見つからないくらいトレビアンだが、世間の激動についての認識は年相応のただのおじさんたちである。という当然の事実が判明した。先生たちがいかに激務をこなしているかは重々承知である。激務だからこそ、いかに難病女子がシャバで苦勞しているか、患者にとって何が大事なのか、わかってほしい。」 329P

NIA (Nan=難 Intelligence Agency)・・・著者の常套的冗談的造語・・・命がけの病院脱出作戦 329P

映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 022

・西原孝至監督「もうろうをいきる」2014

シールズのドキュメンタリー映画を作った監督の作品です。

盲ろう者はさまざまなひとがいて、コミュニケーションの方法も違ってきます。

そのことと、生きる術を習得していく様子も描かれています。そして東日本大震災などで環境が変わることによって、困難さを抱えさせられていく、この国の支援の体制の作れなさがそれを倍加している様子が伝わってきます。

支援の必要なひとに、どういう支援をしていくのか、もっと、「必要なものを必要なだけ」きちんと無条件の支援の態勢が必要なのです。この国の「福祉」の貧困を、「そもそも福祉とはなにか」ということを考える必要があるのではとつくづく思うのです。

たわしの映像鑑賞メモ 023

・古居みずえ監督「飯館村の母ちゃんたち 土とともに」2016

飯館村はフクシマ原発事故で、かなり原発から離れていたにもかかわらず、ホットスポットになって、全村避難に追い込まれた村です。農村が総体的に過疎に追い込まれる中で、ここでは新しい試みをしていた地域で、土に対する思いが深く、それが一挙に無に來去られたような状況です。

このドキュメンタリー映画の主人公は二人の「母ちゃん」、ひとりはずごくおしゃべりで、もうひとは絶妙な合いの手を挟みます。郷里を追われて福島県内の仮設住宅に暮らし、そこで土地を借りて農を営み、郷土料理の紹介などしているのですが、郷里への思いが募り、その郷里・飯館村に一時帰村すると、そこにはフレコンパツクの山、政府や県の方針で、避難解除の基準を、平時の20倍にして、帰村を進めようとしているのですが、農がどこまでできるのか、そして放射能汚染で、子どもを抱えた家族は帰れず、盆・暮れで孫たちが帰ってくるのもままならず、家族がバラバラにさせられています。

この映画はわたしの住んでいる地域のお祭りの中で自主上映したもの、監督の講演もあり、質疑応答もありました。質問者もいろいろな意見が出ていて、「余り放射能の危険を言うと、そこに住んでいるひともいるのだから」というような意見や「もっと原発反対の意思を出した映画にしてほしかった」という意見が出ていたりしました。

この映画監督は長年パレスチナの難民をとり続けていたひとです。原発事故で、難民・棄民になっているひとたちへ、難民というところのつながりで、そこで生きる人たちを描いたのだと思います。戦場の映像を撮る監督の中には、悲惨な中で、なおかつそこにある子どもの笑顔を撮ったりしているひともいます。そこで、平和を訴えたりもしているのです。ちょうど、読書メモで「難病」の「難」とのつながりとも感じていて、そのあたりのつながる思いを聞いて見たかったのですが、訊き逃しました。別の機会にこの監督の他の映画など観てみたいとも思っていました。

(編集後記)

◆突然の解散総選挙、更にむちゃくちゃな政治状況、選挙モードになる前にと、情況への提言的なことを巻頭言に載せて、急遽発刊です。おかげで、隔月刊が、少し間隔が縮まりました、

◆アベ政治を追い込んだら、こんどは「みどりの狸」が出てきました。少しは分かりやすい構図になってきているのですが。リンカーンの「多くの人びとを短い間だますことはできても、少しの人びとを長くだますことはできても、多くの人びとを、長くだますことはできない」という有名な提言があるのですが、もう「短い間」ではないなという思いがしてきています。リンカーンをうそつきにしないためにも、ごまかしの政治をストップさせないと、と思ったりしています。民衆のひとりとして、いろいろ動いているのですが、数のひとりしかなっていません。それでもやっていくしかないのですが。

◆「読書メモ」は、読み落としていたものを追っているのですが、一見バラバラですが、それでもわたしの中ではつながっています。

読み込んでいく課題がそれなりにイメージできてきていて、からだは、四つか五つほしいという心境です。どう考えても、もうわたしの残された人生で、やりたいことがやりきれない思いの中で終わりそうで、どこかで、やれることを絞り込んでいかねばなりません。

◆「反差別原論」の断章は、書き始めていたのですが、間に合わず今回はお休みです。

◆モリス本の翻訳をなんとかしなくてはと、翻訳ソフトを使いつつ、なんとか少しはソフトの使い方も分かりつつ、誤訳しないようにと英語の勉強も始めました。何せ、若いときから記憶が苦手な、単語が覚えられない。70も間近なのにと、挫折の危機感を抱きつつの大冒険です。実は、モリスだけでなく、何かこれは読んでおかななくてはという本も出てきています。こちら先が長い、楽しみながら本を読み、活動していくという生き方とは無縁のままに、それでもあせるとろくなことはない、あせるまいと言いつつ聞かせて。

反障害－反差別研究会

■ 会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め

理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論していきたいと考えていきます。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.taica.info/>

ホームページトップ

<http://www.taica.info/toppage1.html>

「反障害通信」一覧

<http://www.taica.info/kh.html>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>